

## 主日礼拝説教「あなたの部屋を明け渡して」

日本基督教団石神井教会 2017年11月5日

### 【旧約聖書日課】創世記 4章1～10節

1さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。2彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。3時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。4アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、5カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。6主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。7もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

8カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。

9主はカインに言われた。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

カインは答えた。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」

10主は言われた。「何ということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。」

### 【使徒書日課】ヨハネの手紙一 3章9～18節

9神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。10神の子たちと悪魔の子たちの区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。

11なぜなら、互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。12カインのようになってはなりません。彼は悪い者に属して、兄弟を殺しました。なぜ殺したのか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。13だから兄弟たち、世があなたがたを憎んでも、驚くことはありません。14わたしたちは、自分が死から命へと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛することのない者は、死にとどまったままです。15兄弟を憎む者は皆、人殺しです。あなたがたの知っているとおり、すべて人殺しには永遠の命がとどまっています。16イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。17世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。18子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。

### 【福音書日課】マルコによる福音書 7章14～23節

14それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。15外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」16「聞く耳のあるものは聞きなさい。」

17イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。18イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分りが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分らないのか。19それは人の心の中に入るのはではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物清められる。」20更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。21中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、22姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、23これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

## 心の中を開いてみたら…

教会は、一年中どの日曜日も、信者の皆さんだけでなく初めての方でもどなたでも、多くの方がおいでくださることを願っているところです。それどころか、日曜日以外の平日のいつでも、できるだけ多くの方に教会においでいただきたいと願っているのです。可能ならば、一年 365 日 24 時間、ずっと入口の扉が開け放たれていて、絶えず誰かが出入りし、ここで祈りの営みが続けられているような教会。実際、多くのカトリック教会は、そのように聖堂の扉が開放されているようです。わたしたちの教会では、諸事情で、今すぐにそのようにはできないでしょうが、それでも、できるだけ、いつ、だれが来られてもお入りいただけるようにと心がけているつもりです。

もちろん、教会堂の入口の扉がいつも開けられているからといって、すぐに、多くの方が気軽に出入りするようになるわけではないでしょう。教会堂の中で何が行われているのか、どんな人が集まっているのか、中に入ると何をさせられるのか。そのようなことを知らずに、好奇心だけで入って来られるような方は、あまりいらっしやらないと思います。だからこそ、教会の中が見えるように、外の人に見えていただけるようにと、日々頭をひねり工夫もしています。

なぜ、教会は、それほどまでして、多くの方においでいただけるようにするのでしょうか。それは、何と言っても、わたしたちが主と信頼するイエス・キリストが、いつでも誰のことも分け隔てなく、ご自分のもとにお招きになられていたからです。福音書を読み進めると、主イエスの食卓には、実にさまざまな人が共に座っていたことがわかります。わたしたちも、その主イエスに倣って、教会に誰でも分け隔てなくお招きしたいと願っているのです。

そればかりではありません。主イエスは、子どもや小さな者、弱い存在を受け入れることは「わたしを受け入れる」(マルコ 9:37) ことだと言われ、さらにそれは、「わたしをお遣わしになった方を受け入れる」(同) ことだと言われたのです。教会が、どなたでも、一人でも多くの方をお迎えしたいというのは、わたしたちが、主イエスをお迎えし、主イエスの御父なる神をお迎えしたいと、そう願っていることなのです。

ですから、わたしたちは、多くの方を、ただ教会堂にお迎えしたいのではありません。わたしたちの中に、わたしたち一人ひとりの心の中に、お迎えしたいのです。心からお迎えして、わたしたちの心の中をさへご覧いただきたいのです。

けれども、わたしたちには、心配があるのです。わたしたち自身が、そのような心の準備が十分にできているか、心配なのです。主イエスは、今日の福音書の中で、わたしたちの心の中にあるものがいかに汚れたものであるかを、これでもかというほどの悪徳を列挙して、お示しになられています。事実、わたしたちは、人前では取り繕っているとしても、決して人には見せない心の中の汚れた部分を、持っているものです。それが時に噴き出て来て、わたしたちは、キリスト信者であることを表明しながら、主イエスの教えを蔑ろにして、兄弟を愛さない、隣人を愛せない、という現実に苦しむことが、しばしば起こるのではないのでしょうか。

## 「カイン」のようにしかなれない!?

今日の使徒書「ヨハネの手紙一」は、主イエスのお教えくださった「互いに愛し合うこと」にいつも立ち返るようにと、わたしたちに教えています。しかも、手紙の著者ヨハネは、それを単なるわたしたちの心がけとしてではなく、「言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう」と言うのです。ヨハネに言わせれば、「神を愛していると言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者」(4:20)なのです。もちろん、そこまで言うのは、ヨハネが、「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったから」(4:19)だという確信があるからです。

ヨハネは、神の愛を確信し、自分を愛してくださる神を、深く心の中にまでお迎えしていたのでしょ。そのヨハネにしてみたら、主イエス・キリストを知り、神の愛を知るようになったのに、なお、その愛の神を自分の心の中深くまで迎えることができず、互いに愛し合うことが実践できないでいる人たちのことがもどかしかったのかもしれない。

わたしたちも、今ヨハネがこの教会にいたならば、厳しく戒められなければならない者かもしれません。「カインのようになってはなりません」とヨハネから言われている当事者なのです。

旧約日課の創世記は、「カインとアベル」の物語の前半です。カインとアベルは、最初の人アダムとその妻エバとの間に生まれた者として描かれる兄弟です。その兄弟同士であるカインがアベルを殺してしまったという物語です。しかし、この物語は、単なる人類最初の兄弟殺しの記録、というようなものではないでしょう。これは、「カインのようにしかなれないわたしたちの物語」なのです。

カインとアベルは、それぞれに土を耕したり羊を飼ったりして働いた結果の実りを、主なる神に献げ物としました。ところが、カインには、神がアベルの献げ物にばかり目を留められ、自分の献げ物には目をお留めくださらないように思えたのです。ここには、そのような、カインの目から見た神のお姿が、描かれています。神は、分け隔てをなさらないお方ですし、えこひいきされるようなお方ではないのです(もし、そうだとしたら、そのようなお方を神とお呼びすることはできないでしょう)。

わたしたちは、この世を生きていく上で、どうしても他の者と比較をして自分の評価しないではいられません。そのような他者との比較を、わたしたちは、神を信じる信仰者になったから、すっかりしなくなるかという、どうも、そうはいかないのです。それどころか、信仰に関わることさえ、他の人と比較してしまうのです。神の自分に対する扱いが不当だと訴え、もっと自分に目を掛けてくれるようにと願ったりする。詩編にも、そのような祈りの言葉が多々、出てきます。

聖書の描き出す信仰者の現実、そのような姿です。とても「悟りを啓いた聖人」とはいかないのです。カインと何ら変わらない、うっかりすれば何かの拍子に兄弟を殺してしまうような者。それが、わたしたちの現実の姿、神を信じるようになった後にも拭い去れない姿だ、というのです。

## 「アベル」はどこに？

わたしたちは、確かに、実際に、兄弟も他の誰も殺してはいないかもしれませんが。しかし、主イエスが指摘された心の中を見渡してみるならば、わたしたちの中には、なお隠し持ったものがあるのです。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別。それを、体よく隠しているだけにすぎない。いいえ、自分自身の目からさえ隠してしまって、神の目にも隠したつもりになっているのかもしれない。

アベルの姿を見て、自分と比較をし、神のなさり方を不満としたカインは、神の前に顔を伏せました。自分の姿を隠したのです。神の目から、自分の目から。しかし、それは、自分の中にある殺意に身を任せてしまうことでした。カインは、神から顔を逸らして、ただアベルに相對し、アベルを殺してしまったのです。

「お前の弟アベルは、どこにいるのか」。

わたしたちの立ち直りは、いつも、神からの呼びかけによって始まります。カインは、神の呼びかけに気づいたのです。もちろん、神に対する不平不満が解消していたわけではありません。それでも、神の呼びかけによって、カインは、神と対話し、神との関係を新たに始めたのです。

「お前の弟アベルの血が土の中からわたしに向かって叫んでいる」。

神が、カインに繰り返し告げているのは、弟アベルのことです。アベルの血、命のことです。しかし、神は、カインにアベルの命を奪った償いを求めて、カインの命を取られるということはなさいません。むしろ、ここで神がカインに繰り返し要求しているのは、カインが弟アベルを取り戻すことです。カインの中に、アベルを回復することです。

「アベル」。これは、不思議な名前です。「空虚、空っぽ」という意味の名です。

「アベル」とは、心虚しく空っぽにした人なのです。いいえ、本当に、そんな人がいたのか分かりません。カインの実の弟が、心をまったく虚しくした人だったのかと考えれば、本当はそんな人は存在しなかったのかもしれない。けれども、神は、カインに必要な存在として「アベル」を呼び出されるのです。「空っぽ」の人を取り戻すように、その「空っぽ」の存在を受けとめよと、迫られるのです。

カインの心の中、奥深くに隠されている秘密の小部屋。それが、わたしたちの心の中にもあります。その小部屋を開け放って、そこに隠し貯めこんでいるものを持ち出して、差し出して、空っぽにする。そんな心の大掃除を、わたしたちは、自力では十分にできないのです。けれども、神は、カインに「アベル」の命をお与えくださった。神は、わたしたちに、「アベル」よりももっと貴い方、「イエス・キリスト」の血、その命を、お与えくださった。主イエスは、神の前に、真に「空っぽ」になることを、身をもってお教えくださったのです。明け渡して「空っぽ」になったわたしたちの心の中の小部屋に、神をお迎えするようと、神の御言葉を聞く場を確保するようと、その道を示してくださったのです。

明け渡ししましょう。「空っぽ」の部屋でこそ、主イエスの御言葉、神の御言葉は、確かな支えとして大きく響き始めるのです。